そこに学校があった
休廃校の歴史

昭和中学校（下）

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

予土線開通とグラウンド

前号で「1951（昭和26）年に、現在の国道に沿う形で東西に長い校舎が新築された」と書いた。グラウンドは校舎の南側、つまり現在残っている小中学校のグラウンドと同じ場所であったが、1973（昭和48）年までは、現在よりも2mほど低く、校舎からは数段の階段を降りたところにあった。同年、ここに盛り土をして現在の高さになったのである。さて、その盛り土はどこから持ってきたか？それは、この翌年、1974（昭和49）年に開通した国鉄予土線に関係する。そう、トンネル工事で出た残土である。「かさ上げされたばかりのグラウンドには、黒っぽい石がゴロゴロしていた」と、この年度の卒業生が覚えていた。また、当時、校舎の東側（現在と同じ場所）に旧体育館があり、かさ上げするまでは、地下が駐車場になっていたらしい。それから、校舎と体育館の間に土俵があった。この土俵は、後に新校舎建設と共にグラウンドの南西端に移設され、2000年頃までは残っていた。

昭和48年頃の小中合同運動会

第5種公認陸上競技場

グラウンドがかさ上げ整備されると同時に、幡多地域初の「第5種公認陸上競技場」に認定された。これによって、当時、各校持ち回り開催だった「幡多地区通信陸上大会」が、毎年昭和中学校で行われるようになり、これは、宿毛陸上競技場ができるまで続いた。通常トラック一周は400mのところ、昭和中グラウンドは200mしか確保できなかったにも関わらず公認されたということは、当時の幡多地域の各中学校のグラウンド事情が相当厳しいものであったことを物語っている。さて、整備されたこのグラウンドで生徒たちは躍動していくことになる。

記念碑の空白スペース

北ノ川中学校の回で同中学校のソフトボール部の活躍に触れたが、昭和中学校のソフトボール部もまた凄い。そして、これまた北ノ川と同様、ソフトボール部の前身は野球部であった。1974（昭和49）年3月、県選抜野球大会幡多地区予選で好成績を上げ、初の県大会に出場した。今のように国道が整備されていない時代である。大方で行われた幡多地区予選でも生徒たちは泊まり込み。なんと、旅館へは米を持参したという。高知市での県大会は、まるで全国大会に行ったような感覚だったらしい。

県大会初出場を果たした野球部時代

そんな強豪野球部は、後年ソフトボール部としてさらに躍進する。1987（昭和62）年3月、第一回全国中学校選抜ソフトボール大会において優勝。つまりこの大会の初代全国チャンピオンとなったのである。その3年後の1990（平成2）年8月、第12回全国中学校ソフトボール大会でも優勝。さらにその6年後、第18回大会でも全国の頂点に立った。この18回大会開会式の各県の代表校紹介でのこと。昭和中学校の全校生徒数が55名とアナウンスされた時、会場のあちらこちらでクスクスと笑い声が起きたという。監督はじめ、選手たちはこれに発奮し、快進撃の原動力に換えたのであった。3度目の全国制覇を成し遂げたソフトボール部は、その偉業を記念碑に残した。その際に4度目、5度目のためのスペースを残しておいた。残念ながら、そこに文字が埋まることはなかった・・・かに見えるが、この空白の光沢だけのスペースはソフトボール部だけのものではなく、その後の昭和中学校のすべての生徒たちの青春の日々が映し出され、さらに「各々が刻んでいく未来」のためにあるのではないかと思えてならない。その意味では、記念碑を作るときに「よくぞスペースを空けてくれた！まさにGood Job！だった」と思うのである。

2015年3月、昭和中学校の歴史はその幕を閉じた。そこにはいつも子どもたちがいた。そこに学校があった。（おわり）

ソフトボール全国制覇の記念碑。
4回目以降のために左側にスペースが設けられた

町のうごき

（4月30日）	人　口	前月比
男	6,920	+10
女	7,476	0
計	14,396	+10
世帯数	7,793	+30

	出生	死亡	転入	転出
男	0	14	43	19
女	3	15	31	19
計	3	29	74	38

（4月中の届出）

窪川地域 10,286人　大正地域 1,985人　十和地域 2,125人

四万十町通信 2026.6月号 Vol.243（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／弘文印刷
〒786-8501　高知県高岡郡四万十町琴平町16-17　(0880) 22-3124　FAX (0880) 22-3123
UD FONT by MORISAWA 本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。